

ISSN 1910-2396

# 野鳥たより

—北海道—

第 101 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成7年9月21日



ミヤコドリ 新川河口 7. 4. 1 撮影者 関口 健一

〒063 札幌市西区平和2条1丁目1-20



## も く じ

私の探鳥地 (30) 余市川ーハヤブサの水浴びー …神田 健男……………	2
北海道野鳥愛護会25周年記念講演……………	正富 宏之…………… 3
図書紹介・「野鳥お勉強会第100回記念講演会案内・会員名簿について (広報部)……………	7
探鳥会報告……………	8
探鳥会案内、鳥民だより……………	12

## 私の探鳥地 (30)

### 余市川 ーハヤブサの水浴びー

神 田 健 男

清流、余市川が私のフィールドです。余市川はアユつりの北限の川として知られ、夏は多くのつり人で賑わいます。浅瀬でそっと川面に顔を近づけてみると、つまようじの半分にも満たない魚の群を見ることが出来ます。また別の所では人の指ほどの稚魚の群が黒いかたまりになって泳いでいました。流れの中にはこのような場所が沢山あり、そのいくつかは、私の好きなカワセミやヤマセミの恰好の餌場になっています。

彼らは警戒心が強いので観察する時はブラインドを使っています。簡単に組立てが出来るように考えて作りました。私のブラインドはとても小さく、いちばん大きなもので1.35m四方です。川辺の葦の間に迷彩テントを使って作るので、つり人にも気付かれることはありません。カワセミ、ヤマセミの休息の枝や餌場から25～30mぐらいの所に数カ所作りました。

カワセミは初めからほとんど警戒しませんでした。ヤマセミも数日で慣れてくれました。「双眼鏡を持っていつものブラインドへ」ーこれが私の休日の最大の楽しみです。今年はこのブラインドの中からヤマセミやカワセミのダイビング、エサ運び、水浴び、休息、キセキレイの子育て、イソシギ等を観察することが出来ました。

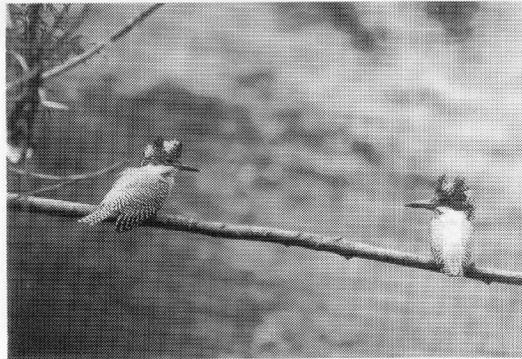
ーそして今年最大の出来事ー7月6日川の中州に大きな影が舞い下りました。そっと双眼鏡をのぞく。ハヤブサだ！(心臓がバクバク)周りを警戒している。幸い今日はつり人はいない。そしてゆっくり、ゆっくり水浴びを始めた。気持ち良さそうだ。ほんの数分間のことでしたが堪能させてくれました。

ブラインドの中にはいろんな虫が入って来ますが驚いたのはスズメバチ、3回。すぐに逃げ出しました。あまり大騒ぎせず、サッとその場を離れるのがいちばんのようです。数分でいなくなりました。

ヤマセミは7月23日午前11時に1羽巣立ちしました。朝から親鳥が魚をくわえて巣穴の回りで騒いでいたので「巣立ちは今日」と確信していました。巣穴はブライン

ドから離れているので巣立ちの瞬間は見る事が出来ませんでした。若鳥は墜落寸前の小型飛行機のような飛び方をしていました。翌日、ブラインドの前の枝へ親が若鳥をつれて来てくれました。

清流といわれる余市川も近年、ゴミや生活排水などで汚れが目立って来ているようです。7月10日には長いつり糸を足かららせて上空を行くセグロカモメを見ました。もとの清流をとり戻そうと条例制定の動きもあり、住民の関心も高まっています。



巣立ちした若鳥(右)と親

鳥を見るには、仁木大橋、その上流の砥の川橋付近までが良いと思います。運が良ければ橋の上からカワセミのダイビングを見ることが出来ます。国道5号線からすぐ近くです。

ー余市川の周辺の鳥ー

カワセミ、ヤマセミ、ミサゴ、キセキレイ、ハクセキレイ、コチドリ、イカルチドリ、ソリハシシギ、カッコウ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、アオジ、ウグイス、オオヨシキリ、モズ、イソシギ、カモメ類、まれにハヤブサ等

〒046 余市郡余市町黒川町467-6

# 北海道野鳥愛護会25周年記念講演

平成7年5月20日 札幌市女性センター

専修大学北海道短期大学教授（会員）正富宏之

私とタンチョウの付き合いは長いのですが、そのほかの野鳥とも多少顔見知りになっています。例えば、ここにご出席の小山政弘さんほかの皆さんと、サンクチュアリができる前のウトナイ湖で、櫓を立てて水・陸鳥を大がかりに調べたこともありました。しかし、最近はずつとツルのことだけで、ほぼ手いっぱい状態です。

今日は、北海道野鳥愛護会25周年のおめでたい行事でもありますし、「北海道の鳥」でもありますので、タンチョウのお話をいたします。

## タンチョウの分布

タンチョウは、大陸（極東）と北海道の二つの群れに別れて住んでいます（図1）。



図1 世界におけるタンチョウの分布

二つの群れの違いは移動する距離の長さです。大陸の群れは、アムール川流域や中国東北部と長江（揚子江）北部地域のあいだ、1,000-2,000kmを渡ります。一方、北海道のタンチョウは、遠くてもせいぜい釧路と北方領土のあいだ130kmほどしか移動せず、一年中北海道に住んでいます。

## タンチョウのたどった道

### A) 絶滅(?)から再発見まで

タンチョウの話題で最大のことは、北海道の「タンチョウは一度絶滅しかかった」ことでしょう。数が最も少ないときは30-40羽になりました。この羽数は、繁殖に必要なさまざまなことを考えますと、絶滅と同じとってよいかも知れません。

しかし、幸いに危機を回避し、絶滅から抜け出すことができました。

日本のトキは絶滅しました。(1羽では繁殖不可能)。それに関連して、先日、新聞記者の方から、「なぜトキは絶滅して、タンチョウは絶滅しなかったのか?」と尋ねられました。

私の答はこうです。トキが絶滅したのは「主に水田地帯で餌をとっていたので、農業の影響を受け、そのため産卵・繁殖ができなくなった」のに、タンチョウは、「広い湿原を採餌場所としていたため、農業の影響が少なかったから」でしょう。

日本で、なぜタンチョウが少なくなったかに話を戻しますと、三つの原因が考えられます。タンチョウの一部は、以前に本州-恐らく関東-まで渡っていたと思われます。徳川幕府が倒れて行政が混乱し、タンチョウに対する厳しい規制がなくなり、明治維新のドサクサに相当数が捕獲されてしまいました。(注)

(注) 江戸時代には「ツル殺しは死罪」という厳しい掟があった。明治の中頃には、本州からタンチョウは姿を消してしまいました。

また、タンチョウは冬に道南などにも集まり、餌をとっていました。しかし、次第に湿地や海辺は開発され、人工物で覆われてしまい、タンチョウの越冬地がなくなり餌不足におちいりました。

さらに、タンチョウにとっての繁殖地である北海道で耕地開発が進み、例えば石狩地方でも、急速に湿地や泥炭地がなくなっていました(図2)。

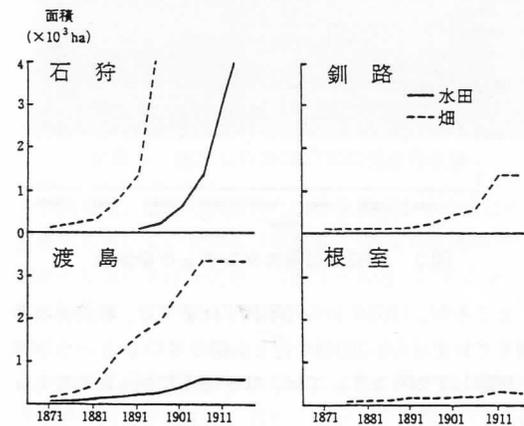


図2 北海道の4地方における耕地面積の広がり

前世紀末には、白石村（現在の札幌市白石区）で繁殖していたことが犬飼哲夫先生によって記録され、「ネコがツルの雛をくわえてきた」そうです。

ところが、今世紀初頭から、札幌や東京あたりにタンチョウの情報が伝わらず、「タンチョウは絶滅したらしい」と本にも書かれました。

しかし、現地の人々はタンチョウがいることを知っていました。1923-1924年に都会の人へこの情報が届き、「タンチョウは残っている！タンチョウ再発見！！」となった訳です。

当時、現地で生息調査が行なわれましたが、今日と違って観察器具も十分でなく、道路などもろくにないといった悪条件のもとで、調査は大変だったようです。住民にたずねたり、馬で湿地を行ったりして、20羽ぐらいいるだろうと見当をつけています。恐らく、釧路湿原ではそのくらいだったのでしょう。しかし、そのころ他の地域にも少しいただろうと思います。

その後、保護のためドジョウなどを撒いたりしました。しかし、4半世紀のあいだ、30-40羽で増えもせず減りもせずの状態が続いたのです。原因は、冬のあいだ十分な餌がなかったからでした。

#### B) 給餌成功から現在まで

1952年の冬、道東は猛吹雪。餌をとれないタンチョウは、まさに絶滅の危機！しかし、幸いに農家の人々がタンチョウにトウモロコシを与え、人工給餌に成功しました。

こうして、冬の餌を給餌によってまかなうことができ、体力をつけることによって個体数は徐々に増えてきました（図3）。

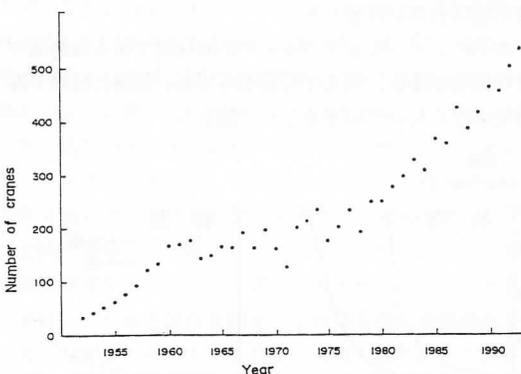


図3 1952年以降のタンチョウ個体数

ところが、1960年から70年代半ばまでは、数はあまり増えていません。200羽を切るか切らないかという水準で推移しております。では、なぜ増えなかったのでしょうか？

考えられる大きな要因は、タンチョウが電線にぶつかっ

て死ぬケースが増えたことです。1年間に20羽くらい死ぬ。200羽分の20羽です。雛が全体の10%増えても、死ぬ数が10%。結果としてプラス・マイナスが0となります。

それなら、なぜ電線にぶつかるのが多かったのでしょうか。給餌が成功するまでは30-40羽でしたから、繁殖できるのは10番いほどだったでしょう。そして、その子供達が成長して子を産み、近親交配の割合が高くなります。そのため、生まれた子に異常が生じたのかもしれない。

これは、飼育個体の例ですが、盲目のタンチョウが生まれたこともあります。もしかすると、こうした異常が電線によくぶつかる原因だったのかもしれない。

しかし、1975年頃からタンチョウはだんだん増えて、現在570-580羽くらいです。ご存知のように、毎年12月5日をタンチョウの生息一斉調査の日としています。上の羽数は野生のものだけで、この他に釧路動物園やツル公園などに40羽くらいがいます。

絶滅しかかった鳥がこのように増えてきたことについては、世界的にも貴重なことと賞賛されています。そうなったのも、地元の農家の人を始め多くの人々の努力のたまものです。

それでは、タンチョウはどこまで増えるのでしょうか？

実は、羽数がこの3年間ほど頭打ちになっています。総数は600羽弱で増えていません。つい昨日（5月19日）まで現地で調査していたのですが、巣の数も170くらいで、あまり増加しておりません（表1）。

表1. 最近の巣数と個体数

年 度	平成4年	平成5年	平成6年
巣 数	161	171	167
個体数*	578	590	573
*：野生個体のみ			

今何が起きている？

#### A) 環境の悪化

ここで、少しスライドをご覧くださいながら話を進めます。

タンチョウのいろいろな行動のうち、これが鳴き合いです（写真1）。オスが一声鳴き、すぐ続いてメスが二・三声鳴きます。メスの口数が多いのは、ある動物と同じと言えます。（失礼！）。

タンチョウは開けたヨシ原で営巣するのが普通です。が、こんなハンノキ林の中に巣があつたりします（写真2）。

写真にみる風景は、何も説明がなければ釧路か根室の草原と思われるでしょう（写真3）。けれど、実は国後島のケラムイ岬です。この地域では多いときで3番いほ

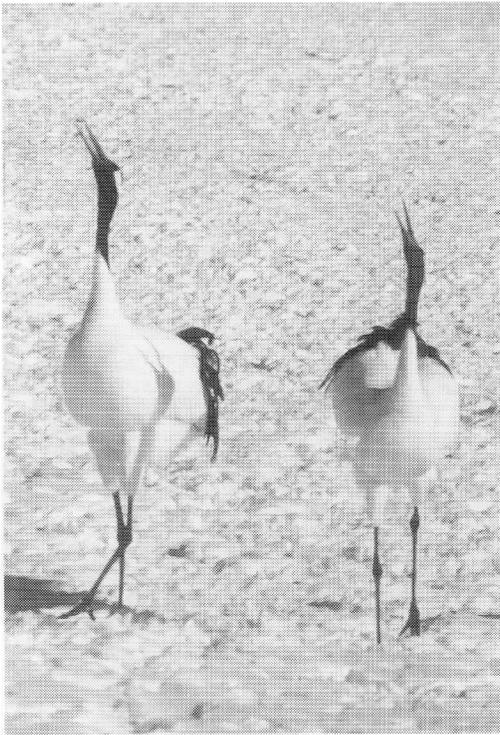


写真1 鳴き合い

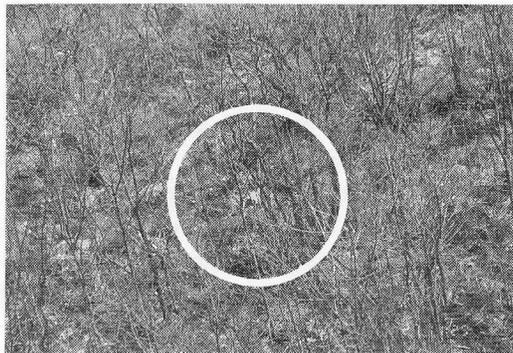


写真2 ハンノキ林内での営巣



写真3 国後島の湿原

どのタンチョウが繁殖します。

北方領土では1970年代以前にはタンチョウはみられませんでした。その後いくつかの島で、恐らく北海道から行った個体が少数営巣し、冬はまた北海道へ戻ってきています。これから北方領土でタンチョウがどれほど暮らせるか、よく分かりません。

道東の湿地では、川は直線化され、周囲の湿地も乾燥して農地となり、生息地が狭められています。(写真4)。川はコンクリート三面張りの水路となり、生息動物も限られています。

湿地をとりまく丘陵も、森林の皆伐により丸坊主となっています。



写真4 直線化された川と耕地となった湿地

その結果どうなるかといえば、雪解け水や雨により一気に水があふれ、地面にあるタンチョウの巣は水没し、放棄せざるを得なくなるのです(写真5)。



写真5 増水した河口で水に浸される巣

十勝では、農地に囲まれた小さな水溜まりのほとりで営巣する番もありますし(写真6)、根室の東梅岬では、国道や私道がそばを走り、人家なども近くにある狭い湿地に巣を構えています(写真7)。

こうしたところでは、キツネをはじめミンクやイタチ、それに人家近くではカラスなどにより、卵や雛が襲われる危険が高くなります。ただ、ワシ・タカ類がツルを襲うことはあまりないように思います。



写真6 十勝川の小さな営巣地



写真7 人家・道路近くの根室の営巣地

なお、電線へぶつかる被害は、幸い北海道電力(株)などのご協力で電線の一部に保護標識がとりつけられてから、かなり減りました(写真8)。

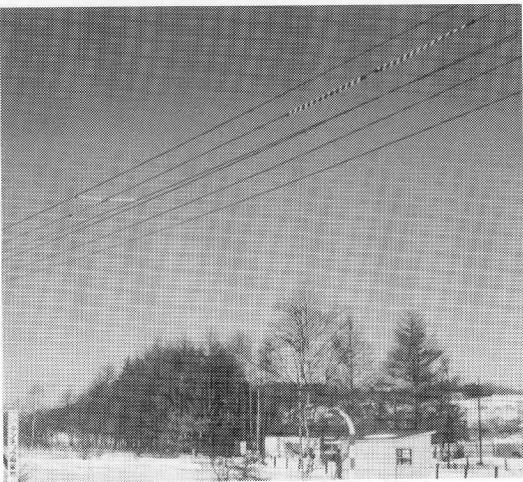


写真8 電線につけられた警戒標識

さて、湿地がなくなる一方で、タンチョウの数は増えています。このため例えば、釧路湿原では巣と巣の距離が縮まってきています。タンチョウは縄張り意識が強いのですが、お隣さんがだんだん近くなって、イライラし

ているかもしれません。近いところでは、200mほどの至近距離でお互い営巣する例もみられます。

**B) 雛はどれほど生き残る?**

こうしたタンチョウの保護を図るため、しっかりした調査が大切で、そのひとつに標識付けがあります。

1988年から雛に脚輪をつけ(写真9)、これまで73羽(5月現在)につけてその半分ほどが生き残っています。この脚輪により何が分かるのでしょうか。



写真9 雛への標識付け(体重測定中)

例えば、2個生んだ卵の性の組み合わせは、オスどうし、メスどうし、オスとメス、という三通りですが、最も多いのは最後のオスとメスの組み合わせです。また、メス対オスの割合(性比)は今のところ1:1.3ほどですが、ここ数年新しく生まれた雛でみると同数のことが多いのです。

また、標識をつけることで、どのくらい生き残る(死ぬ)かも次第に分かってきました。標識をつけるのは、生まれて1ヶ月半ほどの雛ですが、それから最初の冬を越すことのできるのはその60-70%です。言い換えると、30-40%のものがそのあいだに死ぬわけです。

卵を生んだ家族がどれほど子育てに成功したか(最初の越冬期まで)を調べると、30%ほどに過ぎません。それをもとに計算すると、孵化した雛の60%ほどが、孵化して1ヶ月半ほどのあいだに死んでいることとなります。

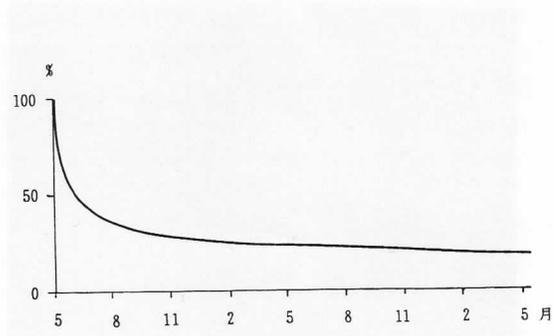


図4 タンチョウの雛・幼鳥の生存曲線

標識鳥の生き残り数からみて、今のところ1歳を過ぎると、1年におよそ10%が死ぬことになります。ですから、タンチョウは生まれて短期間にどんどん死に、生まれて10ヶ月まで生き延びると、死ぬ割合は減り、ほぼ一定になると言えそうです(図4)。

小さな雛がなぜそのように短いあいだに死ぬのか、原因はまだよく分かりません。それでも、繁殖地が人間の生活圏に近くなって、カラス、イヌ、ネコなどに襲われる可能性のほか、先天的な病気、環境の悪化などいろいろなことが想定されます。

#### ツルと暮らすために

ともかく、現在の「野生の」ツル570羽という数も、人間が給餌でなんとか保っているのが実態です。もし、人手をまったく加えず、本当の野生のままにしたら、20羽も生存できるかどうか疑わしいのです。そしてその先は絶滅です。

北海道のタンチョウをより安全に保つためには、新しい視点からの施策も必要です。そして、このたぐい稀な

すばらしい鳥と私たちが長く共に暮らせるよう、これ以上繁殖地を狭める湿原の破壊や、生息環境の悪化を招いてはなりません。そのために、私たち人間にライフスタイルの転換が求められているのです。

〒062 札幌市豊平区西岡3条9丁目11-16

〒079-01 美唄市光珠内 専修大学北海道短期大学



正富教授を囲んで

#### 図書紹介

「北海道の野鳥」林 大著作 [平凡社]

173種の野鳥たちが、林氏の美しい写真や彼自身のフィールドノートとともに、この本でよみがえります。

シマフクロウ、シロハヤブサといったものからシジュウカラ、ヒヨドリのような身近な鳥まで、どの鳥たちも躍動感にあふれ、なおかつシャープな映像でとらえられています。『自然を愛し、鳥を愛し、そして家族を愛した一人の写真家が、その生涯をかけて撮り続けた』作品の数々は、故人を知らない人にも大きな感動を与えてくれることでしょう。

竹田津実氏、松井繁氏、藤巻裕蔵氏、河井大輔氏らによる解説、探鳥地ガイドつきです。

会員割引価格 3,500円(定価 3,800円)

郵送ご希望の方は送料をサービスいたします。

\*お求めは下記まで

エコ・ネットワーク：札幌市北区北9条西4丁目エルムビル8階 Tel (011-737-7841)

#### 北海道野鳥愛護会会員名簿

平成7年8月31日現在の会員名簿を作成いたしましたので、別冊のとおりお届けします。

○転勤・転居された方は官製ハガキに新住所、郵便番号、電話番号などをご記入のうえ、下記までご連絡ください。また、名簿の記載事項に誤りのある方も訂正事項をご連絡ください。訂正記事は第102号に掲載予定。

連絡先・〒065札幌市東区北16条東3丁目

ロジェ北16条303 霜村 耕一(幹事)

期限・平成7年10月31日

#### 野鳥お勉強会第100回記念講演会ご案内

1987年5月9日、柳澤会長を第一回の講師として迎えて開かれて以来、野鳥のみならず広く動・植物や自然のさまざまな事象、旅行談などをテーマに専門家による貴重な研究・観察成果のご披露、レクチャーをうけて参りました。この10月度の例会をもって第100回となり、年月にして8年6ヶ月となります。

つきましては、第100回を記念して竹田津実氏をお迎えして、次のように開催いたします。会員の方々はもとより同好の士の多数のご参加をいただけますようご案内いたします。

日時・平成7年10月21日(土)18時～

場所・安具楽 道庁前店2F

札幌市中央区北2条西3丁目

札幌富国生命ビル 電話・011-221-9388

講師・竹田津 実氏

演題・「アフリカの野鳥を訪ねて」

会費・男性 3,500円 女性 3,000円

問合せ・世話人 富川 徹氏(電話・会社 612-8531、

自宅 387-7007)まで。





## 野幌森林公園 探鳥会

7. 5. 7

数田真弓

5月7日、ゴールデンウィーク最後の日、野幌森林公園での探鳥会に参加させて頂きました。

私には、この春が札幌に住んで初めての春です。街を取りまく森を歩くのが楽しく、そこで聞こえるいろいろな鳥の声の主が知りたくて、本やCDを買ってみました。なかなかわかるようになりません。

やっぱり、詳しい方に教えて頂きたいな、と思って参加した野鳥愛護会の探鳥会。初めてだったので、どんな雰囲気なのか、初心者への面倒なんか見てもらえるかしら、ひとつでも鳥の声の主がわかるようになれば嬉しいんだけど、などと思いつつ出かけました。

当日はとても良い天気。鳥の声もたくさん聞かれるのか、たくさんの参加者が集まっていました。愛護会の腕章を着けた方々がいろいろ教えてくれると知ってひと安心。

若葉の柔らかな色やきたこぶしの花が美しい森の中を歩きはじめると、鳥の声や木々を飛び移る姿があちこちで見られました。遠くの切り株の上にいるモズを皮切りに、私の鈍い観察力と小さな双眼鏡ではほとんどとらえられない様々な鳥の姿を、会の方がフィールドスコープでとらえては見せて下さいました。ときどき聞き覚えのある鳥の声が聞こえて、知りたかった声の主がカワラヒワやクロツグミだということを見せてもらおうこともできました。それに、森の中の方ではいろんな鳥が目の前にまで姿を現し、ゴジュウカラやコゲラなど、自分でもみつけられてうれしくなりました。

昼食時に現れて歌を聞かせてくれたオオルリ、午後にはフィールドスコープを通して見たキビタキの、はじめて見る美しい姿にびっくり。巣を出入りしていたヤマゲラや、なかなか見られないというヤブサメの姿、不思議な響きのトラツグミの声なども印象的でした。

楽しくて病みつきになりそうな探鳥会。でも、季節といい、天気といい、こんな探鳥日和はめったに無いのかな。でも、これからも参加させていただいて、少しずつでも鳥の姿や声を覚え、ひとりの散歩でも鳥見を楽しめるようになりたいな、と思っています。

いろいろ教えて下さった野鳥愛護会の方々、楽しい一日をありがとうございました。またよろしく願い致します。

〒062 札幌市豊平区平岸3条15丁目1-27-403

[記録された鳥] カイツブリ、トビ、ハイタカ、オシドリ、キンクロハジロ、オオジシギ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、モズ、ミソサザイ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハジトカラス 以上35種

[参加者] 久保ミツ子、犬飼 弘、香川 稔、砂田絹子、松井 昌、小西敏光・由紀子、矢部光子、白沢昌彦、数田真弓、国本昌秀、国島達夫、後藤義民、竹中昭雄・悦子、栗林宏三、神野幸子、今泉秀吉、大滝ひとみ、小川裕子、榛葉貴博、高橋利道・キョ、戸津高保、今野 弘、竹内 強・みな子、森田新一郎、斉藤正雄・郁子、霜村耕介、木戸敏博・久美子・泰裕、青地 巧・百合、大槻日出、村上菜穂子、相木大嗣・孝子、吉田幸子、須藤昌三、小島マサヨ、高栗 勇、大西良夫、三船喜克、滝沢聡、日下部ミツ子、石井克巳、鈴木律子、今村敏郎、井上公雄 以上52名

[担当幹事] 井上公雄、栗林宏三

## 千歳川流域の探鳥会に参加して

7. 5. 14 神野幸子

5月14日朝4時。前夜からの激しい雨は上がったものの支笏湖畔の宿を出る時は、霧が深く視界がきかず、こんな日に鳥が見られるのかしらと、心配しながら千歳川流域に着きました。でも川沿いの道を歩き始めると、賑やかに鳥の声が聞こえてきました。ホオジロ、シジュウカラ、ウグイス、センダイムシクイ等々。まだ葉の繁っていない高い樹々の間を小さな鳥達が忙しく飛び廻っています。

双眼鏡で眺めても、その姿をとらえることができず、ガッカリした時です。「アオジが入ってるよ」という声に、慌てて望遠鏡に飛びつきました。低木の梢でアオジが歌っています。曇天のせいか色はイマイチですが、黄色いおなかと黒い斑点が見えます。なお行くと、高い梢のてっぺんで、大きな、きれいな声で歌っている鳥がいます。

オオルリです。望遠鏡でのぞくと、黒い顔と白い腹、背中の色はパッとしないけれど、大きな目であたりを見廻しながら歌っている姿はとても可愛い。アオサギが大きく羽ばたきながら飛んで行きます。カワラヒワがキリキリコロコロと鳴きながら飛び廻っています。誰かが「ヤ

マセミだよ」と叫びました。見ると川の上を白い鳥が、チラチラ飛んで行きます。裸木の枝で、ニューナイズメ。チュンチュン鳴き交わしています。

沿道の草むらには、エゼンゴサク、ミヤマエンレイソウ、エンレイソウ、ニリンソウ、各種のスマレ等々が、精一ぱい春を彩っています。「こんな気持ちのよいコースがあるなんて知らなかった。来て良かったね。」と話しながら歩いて行くと、やがて王子製紙の発電所に着きました。

そこで朝食。雨上がりのせいかダムは深々と水を湛えています。向こう岸には、色合いの微妙に違う桜の花が満開で、その姿を川に映しています。もう少ししたいなあと未練を残しながら、帰路につきました。

ピッコロクルルと可愛い声がしました。キビタキです。忙しく飛び廻って、望遠鏡には入らないけど、繁みの間からオレンジ色の姿がチラチラ見えています。きれいな声で、クロツグミが鳴いていて、しばらく聞きほれてしまいました。開けた川原の高い木の上にビンズイが止まっています。その横の木のとっぺんには、オオルリが高らかに囀っています。向かいの山の樹のうえにはキジバトが……。こんな盛りだくさんの、ぜいたくな探鳥会は初めてでした。親切に鳥の名前を教えてくれたり、望遠鏡をセットしてくれたら、皆様には大変お世話になりました。

充実した楽しい一日を過ごさせていただき、本当にありがとうございました。

〒004 札幌市厚別区厚別中央1条6丁目2-2-203



[記録された鳥] カイツブリ、アオサギ、トビ、マガモ、キンクロハジロ、オオジシギ、キジバト、アオバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、コルリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、

ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、ニューナイズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上51種

[参加者] 青江 正、安達エミ子、岩淵登起子、大橋絵美、大村正道、小川秀子、小川祐子、数田真弓、上口淳子、神野幸子、木村与吉、日下部ミツ子、栗林宏三、小堀煌治、近藤綾子、佐藤正秀、島崎康広、白澤昌彦、渋井節子、榛葉貴博、高栗 勇、竹内 強・みな子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、西川喜久世、温井日出夫、久田伸一、本間裕邦・桂子、松園嘉裕、三船喜克・幸子、柳沢信雄、山田甚一、山田としえ、山田良造、山田玲子、山本次郎、鷺田善幸・幸江・あすか・直樹 以上45名

[担当幹事] 白澤昌彦、三船幸子、栗林宏三

## 鶴川探鳥会に参加して

7. 5. 21 相木大嗣

今回で3回目の鶴川探鳥会でした。過去2回参加して数多くのシギ、チドリ類をみることができました。今回も期待をしていたのですが、札幌を出る時から雨が降っており「あれ、もしかして中止かな。」などと思いつつ、とりあえず鶴川まで行ってみることにしました。9時頃に着いたのですが、やはり雨。せっかく昨年、冬のボーナスで買ったスコープを用意して参加したのですがちょっと残念でした。参加者も10数名と少数でしたが、みなさんベテランの方ばかりなので、特にシギの見分け方を教えてもらうには絶好の機会でした。探鳥会が始まると牧場のあたりから、たくさんのヒバリが出迎えてくれたり、4・5羽のチュウシャクシギが上空を飛んで行くのが見えたりと幸先のよいスタートとなりました。また姿は見えませんが、対岸からのカッコウやオオヨシキリの声を今年初めて聞くことができました。このあたりから雨も小降りになり、河口の方に目をやると、カモらしき群れが見えてきました。「なんだカモメか」と思っていると、「アジサンだ」の声。双眼鏡でよく見ると翼がピンととがっていかっこうがよく、また300~400羽程なのではないでしょうか、空中を舞う姿はそれはそれは、すばらしいの一言でした。やはり鶴川はいつ来ても、天気が悪くても裏切ることなく楽しませてくれる探鳥地だと思います。でもやっぱり天気の良い日にじっくりと見てみたいですね、買ったばかりのスコープで。

〒063 札幌市西区発寒7条7丁目7-14

[記録された鳥] アオサギ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、カルガモ、ムナグロ、ダイゼン、コチドリ、シロチドリ、

ダイシャクシギ、チュウシャクシギ、アオアシシギ、イソシギ、キアシシギ、キョウジョシギ、オオジシギ、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、アジサシ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト 以上36種

[参加者] 佐藤 実、榊川 保・弘子、久田伸一、森田新一郎、相木大嗣・孝子、道場 優・信子、青江 正、羽田恭子、石橋和子、佐藤幸典、山田良造、井上公雄 以上15名

[担当幹事] 山田良造、井上公雄

## 平和の滝夜の探鳥会

7. 6. 3 中正弘子

探鳥会と云えば日中にするものと思い込んでいましたが、夜の探鳥会、なにか神秘的な響きがしてきます。

屋間でも、幽霊が現れると噂の高い平和の滝、夕闇迫る平和の滝で迎えてくれたのは、幽霊ならぬキビタキ、オオルリのさえずりでした。バードウォッチング一年生の私は、野鳥の判別もさることながら、鳴き声を聞き分けるなんて、夢のようなことと思っておりました。

刻々と夕闇が迫るなか、道端に咲くクルマバソウ、クルマバツクバネソウ等をみながら、なだらかな坂道を登っていくと、けたたましい鳴き声に驚かされました。藪のなかからのウグイスの地鳴きでした。あまりの騒々しさに、しばし足を止めました。山の彼方から、麓から、かすかに伝わってくるコノハズクの鳴き声に、日中では味わうことの出来ない、深い感動を覚えました。中空を見上げると、雲の合間に大きな金色の三ヶ月がふわっと浮かぶように輝いているなかヤマシギがゆったりと、黒く塗り込められた谷から谷へと渡っていきました。周辺から、ヨタカがキョツ、キョツ、キョツ、と鳴きつづける声に送られて、今きた道を出発点へと向かいました。

会員の皆様とご一緒でなかったら、とてもこのような探鳥は出来なかったろうと思っております。私にとりましては、いつもとはひと味も、ふた味も違った探鳥会でした。お世話下さった方、会員の皆様、ありがとうございます。

〒063 札幌市西区八軒6条東2丁目6-13

[記録された鳥] ヤマシギ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、トラツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ 以上13種

[参加者] 佐々木綾子、砂川成輝、塩田悦子、榛葉貴博、

小川祐子、山田甚一、中正憲信・弘子、相木大嗣・孝子、長谷川 稔、永島良郎、森田新一郎、柳沢信雄、建部好正、堀口 理、樺山 拓、滝沢 聡、数田真弓、柴田一郎・イク子、成沢里美、井上公雄 以上23名

[担当幹事] 永島良郎、井上公雄

## 植苗・ウトナイ湖探鳥会

7. 6. 11 加藤花子

今日は晴天の探鳥会日和となりました。バードウォッチングを始めてまだ日の浅い私は、植苗・ウトナイ湖での探鳥会は初めてです。

私は山登り仲間と夏山で鳥を見初めた時、鳥の声は聞こえても見えるのは葉っぱばかりで、双眼鏡をのぞいても肝心の鳥の姿が見えず、その声の主がどんな鳥なのかも分らず、私には「鳥を見ることは無理だ」と思っていました。それでも登山をしながら教えてもらい、鳥も少し見られるようになりました。

鳥を見るのに時間をかけすぎて、今日は山頂まで登れるかしら等と心配したり、また私には登山をしながら双眼鏡をぶらさげて登るのも大変で、苦勞をしなければ鳥は見られないものだみに思っていました。

ところが、植苗駅から歩き始めてまもなく、左右から鳥の声が聞こえてきました。

私は嬉しくなってワクワクしながら愛護会の方のそばについて教えてもらったり、フィールドスコープでゆっくり見せてもらったりしました。

本日の一番は、昨年知人から借りた本にシマアオジの綺麗な写真がのっていましたが、身近にこんな黄色い綺麗な鳥がいるのかしらと—そのシマアオジに会えました。

シマアオジは右を向いたり、左を向いたり鳴きながら首をのぼしたり、その首をのぼすと横縞の黄色がのびて薄くなるんですね。

苦勞せず平地で可愛くて綺麗なシマアオジをゆっくり見られて、そのほかにも沢山の種類の鳥も見せていただき、とても楽しい一日でした。

野鳥愛護会の皆様、どうも有り難うございました。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

〒062 札幌市豊平区平岸1条8丁目8-29

[記録された鳥] アオサギ、トビ、コブハクチョウ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ビンズイ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、コヨシキリ、コメボソムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ホオア

カ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハンボソガラス、ダイサギ 以上35種

[参加者] 栗林宏三、相木大嗣・孝子、成澤里美、竹内強・みな子、犬飼 弘、小堀煌治、柳沢信雄、佐藤正秀、豊口 肇・美代子、石橋和子、高栗 勇、羽田恭子、佐藤ひろみ、中正憲信・弘子、松井 昌、久田伸一、後藤義民、野口正男・キヨ、加藤花子、山田良造、井上公雄 以上26名

[担当幹事] 井上公雄、竹内 強

## 東米里探鳥会

7. 6. 18 大村 洋 仔

6月18日、東米里小学校に集合して、初めて探鳥会に参加しました。歩き始めて間もなく「アリスイ」「オオジシギ」とか聞いたことのない鳥の名前が聞かれます。私にはどこに鳥がいるのかさっぱりわからないんですが、愛護会の人達は鳥を見つけるのが早いです。

双眼鏡をのぞいたかと思うと、すぐにスコープをセットして「はい、入りましたよ」と云ってのぞかせてくれるんです。

最初は自分の視力に合わなかったんですが、調節してみると、「まあ、びっくり」図鑑で見ると色まで見えるんです。大感激しました。

それと、自分の家からさほど離れていないところに、こんなに色々な種類の鳥がいるということにも驚きました。(当日は28種類を確認したそうです)

サイクリングが好きでたまたま出かけるんですが、鳥の声を聞くだけで「なんという鳥だろう？」ぐらいにしか気にとめていなかったんですが、鳴き声で鳥の名前がわかるようになったら、サイクリングも数倍楽しくなるでしょうね。

また次の機会にも探鳥会に参加したいと思っています。その節にはまたスコープをのぞかせて下さいね。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

〒003 札幌市白石区菊水元町8条2丁目

[記録された鳥] アオサギ、トビ、チゴハヤブサ、マガモ、コチドリ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハンボソガラス、ハシブトガラス 以上28種

[参加者] 田中志司子、松井 昌、大村洋仔、松浦 哲、藤原浩一、山田良造、羽田恭子、高橋利道、戸津以知子、

相木大嗣・孝子、山田甚一・れい子、中正憲信・弘子、後藤義民、森田新一郎、柳沢信雄、杉田範男、藤原はるみ、網島美恵子、中西寿々代、富川 徹・優・愛沙 以上25名

[担当幹事] 富川 徹、永島良郎



草原の鳥 ノゴマ

## 福移探鳥会

—妻が初めてノゴマを見た—

7. 7. 2 稗 貫 俊 文

7月2日に福移の探鳥会に妻と一緒に参加しました。福移は豊平川が石狩川に合流する一帯です。今住んでいるあいの里の近くに、こんな鳥が集まる場所があるとは知りませんでした。

私も妻も初心者です。鳥を見ても、鳴き声を聞いても、名前がほとんどわかりません。でも、経験のある人が教えてくれます。鳥を見つけ、望遠鏡でとらえて見せてくれます。こうやって図鑑にのっている鳥を、実際にこの目で見る喜びはかけがえのないものです。こんな喜びもあるのかと驚いています。

豊平川河口の林で、木立の中を先頭で歩いていた4人の人がベニマシコを見たと言います。私も妻も先頭に少し遅れて歩いていたので見るチャンスを逃しました。図鑑でそれを確認しながら残念な思いでした。

ノゴマをみました。これで二度目です。鮮やかな赤い色ののどをまた見ることが出来ました。これまで家族のなかでノゴマを見たのは私だけでした。

妻や娘に赤いのどを見たと話するとき、優越感を伴うなにかしら高揚した気分になったものです。ようやく妻もノゴマの赤いのどを見ることができ感激していました。

バードウォッチングは今年の3月頃から家族で始めました。言い出しっぱは妻で、野球で忙しい中学生の息子を除いて、私と妻と小学生の娘がときどき探鳥会に参加しております。妻と娘は西岡水源地でカワセミを見ている。

娘はいまだに「お父さんはカワセミをまだ見てないでしょう」と自慢します。これがなんとも悔しい。我ながら無邪気なものです。

こんなふうに関心のあるところに出ているどんな鳥を実際に見ることが出来るかの期待と喜びで探鳥会に参加しています。

双眼鏡を買い、図鑑を買い、キバシリも見た、オオジュリンも見た、ノゴマも見たと喜んでいました。

少しずつ鳥を見る経験を重ねてゆくと、鳥の生態や環境への関心が深まってゆく予感がします。しかし先のこととは何も考えていません。あまり一時に夢中になることなく、ときには鳥を忘れて朝寝をして、長い目で鳥を見る楽しみを続けていきたいと思えます。

〒003 札幌市北区あいの里2条6丁目3番-3-406

[記録された鳥]アオサギ、トビ、チュウヒ、マガモ、ウズラ、コウライキジ、アジサシ、キジバト、カッコウ、

アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上35種

[参加者]相木大嗣・孝子、石井厚子、五十嵐優幸、井上公雄、大野信明、及川恵美子、小堀煌治、香川 稔、小林弘子、数田真弓、佐々木泰夫、菖蒲谷保、佐藤ひろみ、佐藤 勇、戸津高保・以知子、滝沢 聡、龍上 淳、高橋 洋、高栗 勇、辻 勝司、谷口峰子・栄、道場優、永島良郎・トキ江、中正憲信・弘子、松中洋子、稗貫俊文・由香利、矢野昭二・玲子、柳沢信雄、羽田恭子、山田甚一・れい子、山田良造 以上39名

[担当幹事]大野信明、永島良郎

## 探鳥会案内

【ウトナイ湖】平成7年11月12日(日)

更に南の越冬地へ向かう中継地としてのウトナイ湖には多くのガン、カモ、ハクチョウ類が羽根を休めています。今年生まれた若鳥は初めての長旅で、家族の絆の強いハクチョウのファミリーが目をはきまします。ミコアイサ、オジロワシ等も見られます。温かい服装で参加しましょう。

集合=9時40分ウトナイ・レイクホテル湖畔側

交通=道南バス(苫小牧行き) 新千歳空港9:10発  
ウトナイ・レイクランド前下車

【小樽港】平成7年12月10日(日)

冬の海と聞いただけで身震いがしそうですが、ホオジロガモ、コオリガモ、シノリガモ、ウミアイサ、ウミスズメ、ケイマフリ等のほか、多くの海鳥に出会える楽しさが一杯です。特に初心者にはお奨めで、探鳥の視野が広がりが充実感を覚えるでしょう。探鳥ポイントを貸切バスで回ります。防寒の身支度とお弁当をお忘れなく。

集合=午前10時 JR小樽駅待合室

参加費=1,000円バス代(受付時お支払い下さい)

【藤の沢】平成8年1月21日(日)

餌台に集まるヒガラ、ヤマガラ等のカラ類、アカゲラ、カケス等を観察しながら、集まった人達の野鳥談義や情報など、初めての人にもすぐに仲間入り出来る和やかさのなか、持ち寄りの弁当、名物の豚汁、野鳥クイズのほか、今年はどんなアイデアが飛び出すか楽しみです。知り合いの人も誘って参加してみませんか。

集合=午前10時 白鳥園(南区藤野693-1)

交通=定鉄バス(定山溪線)藤野3条2丁目下車  
徒歩約20分

参加費=500円

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成7年11月5日(日)

平成7年12月3日(日)

集合=午前9時 大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス(文京台線)新さっぽろ駅バスターミナル、8:23分発大沢公園入口下車

○いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

○昼食、雨具、観察用具、筆記用具をご持参下さい。

○交通機関は変更等がありますので、利用される方は各自で再調査をお願い致します。

○探鳥会の問い合わせは、011-851-6364 柳沢宅まで。

## 鳥民だより

◆愛護会の名入りカレンダーの販売について

1996年度版カレンダーを100部、先着順で販売します。申し込み・問い合わせは TEL 011-851-6364 柳澤信雄会長宅まで。

◆新年講演会・スライド映写会のお知らせ

日時・平成8年1月13日(土)13時30分~

場所・(未定、第102号でお知らせします)

会費・500円

講師・東大雪博物館 学芸員(会員) 川辺百樹氏

演題・「大雪山の鳥たち」

○川辺氏といえばミユビゲラ、キンメフクロウ。大雪山系の鳥たちのお話しに耳を傾けましょう。

○恒例のスライド映写会。発表される方はスライドのご用意を。総合調整は山田良造氏。

[北海道野鳥愛護会]年会費 2,000円 (会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465